

チンチン、チリン

松永ひろし

おらが育った村の言葉は、こんなぐあいだった。

「こんガキヤア、なにしてくつかる（おい、こども、なにやっているんだ）」

「んじゃ、いかず。そんなまえに、われ、ちよつくら先にとんでけ（じゃあ、行こう。その前に、おまえ、ちよつと先に走っていきな）」

「こんベトのガキにや、げーに困りやんした（この土のやつには、たいへん困りました）」

「せったかせわねか、せってみる（言ったか言わないか、言ってみなさい）」

この言い回しで、今回、話をしようというのだから、これは、すごいことになりそうだけど、ひとつ、やってみるか。

さて、おらは、パソコンで観光地などの地図をこしれえる仕事をしとる。地図をつくるにやあ、そんな土地のことお、知らにやなんねえから、「取材」とせって、じっせえにえって、あちこち調べるがかかせねえ。

ときにやあ、ひとりで、山あへえる。山の上に、山城のあとがあつたりするでナ。それがどのくらいの広さだとか、見とおしはどうだとか、メモするわけだ。

山のぼりやあ、ちいとも苦んなんねえけど、クマのガキあ、気んなる、苦んなる。

んで、カメラバックにクマ除けの鈴を吊るし

い、チンチン、チリンと音させとる。クマも人間がこええもんだから、音聞くと、逃げるってかな。

鈴はカメラバックからはずさねえ。うっかり、鈴なしで山にへえつちまったら、そりやあ、げーにこええかな。

んで、街ん中でも、チンチン、チリンとカメラバックの鈴がなるもんで、

「いい音ですね、クマ除けの鈴ですか」

「んでやす、山じゃ、クマ除け、町じゃ、人除け」

「人除け？ そりや、また、なんで」

「ほれ、人はよう《人をくった話》をするじゃねえかや、おら、そんが、こええ」

ありやあ、志賀高原の取材でのことだ。

硯川から夏山リフトで前山湿原にのぼつてえ、ワタスゲとかモウセンゴケとかツルコケモモとか、道ばたにへえている花を撮りながら、渋池から四十八池、そこから大沼池にえって、ひるめしや池のよこで食つた。そんあと横湯川ぞいの林道を下りてくとお、山側にダイコンソウの黄色い花があるじゃあねえか。

「こらあ、もうけた。おひさしぶりです」

三脚をおろし、カメラをセットし、ファインダーをのぞき、シャッターを軽く押す。「ジッ」とオートフォーカスがはてれえて、ピントがあつた。

花は、前後にゆつくりうげえてけつかる。ちよつとの風でも花はゆれやがる。こんなときやあ、じいっと待つ。風の息がきれる時を待つ。気長

に気長にじいっと待つ。うごきがとまった瞬間、シャッターを押す。

待っても待っても、ゆれがおさまんねえときやあ、ゆれのタイミングを測るんだ。そいつあ左右にゆれてんだとすと、右から左、左から右にかわる時やあ、理屈あ、とまる。その一瞬をよんで、カシヤツとやる。

なかにやあ、予測のつかねえ、めっちゃくつちやなうごきをしやがるガキもいてけつかるが、そんガキどもでも、じいっと待つ。待つて待つて、そんでもガキのうごきをやめんだつたら、ゆびでギユツと花の茎をつけめえて写す。

最初ッから、ゆびつけえばいいって思うかもしんねけど、ゆびでおせえても、こんだあ、ゆび先のブルブルうごきが花につたつちまうから、どうしたつてかんぜんにや、とまんねえ。

があ、ゆびのブルブルでちつたあ写真がブレやがつても、撮んねえよりはマシつてせうもんだ。

こんときのダイコンソウは、ちよつくら待つたら、うごかんくなつたで、

「いい子だ、いい子だ」

つて心でせいながら、写してき、そんからカメラをバックにえれて、三脚とバックを両の肩にかけりや、チンチン、チリン。そん時だ、

「グウ、ググッ」

と、うなり声みてえのが聞けた。へクマ？ そりや、ねいだろ？

チリン、チリ、チリ、チリ、チリ、チリン。おらは左手で鈴のひもを激しくゆすつた。そんから肩の三脚をはずし、四段の脚をえつとう長くのばした。クマのガキが出てくりやあ、三脚ぶんまわしてたたかうまでさナ。

こんとき、また、

「グウ、グググッ」

あんれえ、なんのこたあねえ、おらの、腹の虫の音でねえか。

こんけえのおらのばええはわれえ話におわつたけど、わんだれも、山じゃ、クマに気いつけるや。まんげえいち、であつちまったら、うしろおふりむかんで、とんでにげろ。